

和歌山県知事指定郷土伝統工芸品

きしゅうびな

紀州雛

平成16年指定 / 指定された地域(海南市)

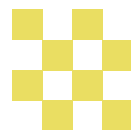
漆器の町で生まれたお雛様

昭和30年～40年代、和歌山が新婚旅行の定番として知られた時代があります。風光明媚な万葉の地・和歌浦や温泉旅情にあふれる白浜、那智勝浦など、各地を訪れるカップルの和歌山土産が「紀州雛」でした。海南市黒江の伝統漆芸を生かした大小、形もさまざまな雛人形がお土産として珍重。今もその名残をとどめ、紀州を代表する工芸品になっています。



紀州雛宗家寺下
● 絵付け師
池島 史郎さん

昭和31年生まれ、漆の町で育ちます。仕事の関係で県外へ、29歳で帰郷。紀州雛宗家として活躍していた祖父と2代目の母を手伝い、漆芸の世界へ入ります。「そのまま今に至り30年近くが経ちました(笑)」。伝統の木地と本漆を生かした職人技を現場で修得。3代目として技を受け継ぎます。



漆器の町のお土産として考案

和歌山を代表する郷土玩具の「紀州雛」。始まりは昭和8年、紀州漆器の本場・海南市黒江で生まれました。きっかけは紀州雛の生みの親であり、池島さんの祖父にあたる寺下幸司郎さんの発案。盆や椀など、日用品が中心だった紀州漆器の町のお土産として、新しい漆芸品を作りたいと、当時海南市にあった漆器試験場の職員と協同で考案。分業制が確立した職人世界で、さまざまな試行錯誤と話し合いを繰り返して誕生しました。昭和30年～40年代頃には、新婚旅行のお土産として紀州雛が県外へ。もともと海南市のお土産だったものが、外へ出て全国に広がることで、紀州・和歌山を指すお土産として定着するようになりました。

形も大きさもいろいろの選ぶ楽しみ

紀州雛の原形に、神功皇后の伝説があります。紀の国を訪れて出会った少彦名命の姿が、美しく麗しかったので小さなお姿(人形)に作り変えたとあり、その後、仁徳天皇がこの地にやってきた際に、神功皇后のお姿として作らせたとの言い伝えがあります。紀州雛は、天然素材の木地にこだわり、紀州漆器の漆塗りや蒔絵などの伝統的な技法を用いて制作。手のひらに乗るミカンのような形の木地に、赤と青の本漆を施し、蒔絵の技法で顔と着物を一体一体に描き込んでいます。ほかにも茶釜のようであったり、こけしのようであったりと、形も大きさもいろいろ。お土産の“選ぶ楽しみ”も紀州雛の魅力です。



日本の美と技が結集した逸品

郷土玩具としての土産物要素を残しつつ、現在は女の子の節句にも本来の意味をもつ雛人形として用いられ、心む愛くるしい姿が県内外で評判です。「最近では日本らしいお土産として、海外へ持って行く人も増えています。」と話すのは、紀州雛宗家寺下の3代目・池島史郎さん。そもそも漆器は英語で“ジャパン”と呼ばれるものであり、紀州雛に描かれる鮮やかな着物や扇も、日本らしさの象徴です。艶やかな本漆の光沢に、木地のもつ自然なぬくもり。そこに職人の技巧が加わることで、日本の技術力の高さをうかがわせる逸品にもなっています。

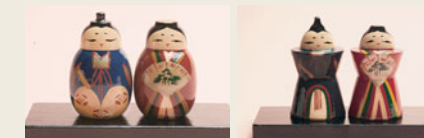
【紀州雛の制作工程】

大きいもので高さ13.5cm、小さいもので4.5cmの紀州雛。しかし大小に関わらず、手間と時間と愛情は一緒。基本的には、伝統的な紀州漆器の工程と同じで、木地師が木(エゴノキ)を削って形を作り、塗師が下地を施して本漆で上塗りします。いずれも分業制で、専門の技術を持った職人が手掛けます。そこから絵付け。宗家の池島史郎さんが登場。1体に使う色は7色程度。1色塗った後に1日乾かし次の色と、塗り重ねていきます。漆は気温や湿度にも左右され、1体完成させるのに2週間～1カ月。職人の丁寧な仕事で、大切にすれば何十年と色あせることなく、艶と味わいを増します。



現在の生活様式に合うお雛様

紀州雛の定番は、ミカンのようなまるっとした形に顔が乗った可愛らしいお雛様。茶釜のような形の紀州雛は、末広がりで贈り物に最適。ほかにも卵の形をしたものだったり、形もサイズもいろいろ。現在の生活様式に合わせる事ができる大きさと本漆の華やかさから、桃の節句にお祝いとして贈られています。



種類も多彩。ひと昔前には、おちょこをひっくり返した面白い形状の紀州雛もありました。

紀州雛の試作品

池島さんの工房に残されていた紀州雛の試作品。80年以上も前のもので、初代・寺下幸司郎さんから職人たちの技と努力が詰め込まれています。

